

謹 弔

次の会員がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

安村 寿嘉 氏	宇部市医師会	8月21日	享年 91
藤嶋 吉郎 氏	徳山医師会	8月28日	享年 91
白石 碩雄 氏	防府医師会	9月 4日	享年 96
野瀬 善光 氏	山口市医師会	9月 8日	享年 77
都志見 格 氏	岩国市医師会	9月26日	享年 60

編 集 後 記

この夏以降、医学部合格率の男女格差についての社会の関心はかなり高く、さまざまな報道があった。真っ向から男女差別だ、許せないという正論から、医療現場の疲弊を考えると仕方ないという懐の広いご意見までさまざまである。どの報道も正しい点を含むが、どこか違和感を覚えることも多かった。

単純に大学入試の不正だといわれると、「いや、医学部を文学部や経済学部と同じに論じられても困る。社会のために税金で医師を養成するという特殊性があるのだ」と注釈をつけたくなる。また一方で、女性医師は、出産育児でうんぬんところされると、「それは長い医師人生の一時期のことでしょう？じゃあ、男性医師でも健康に関わらない方面や医師免許が必要でない職業に就いている人はどうなのですか？」と不穏な気持ちになる。若手外科医減少の原因が女性医師の増加であるような報道には、いや、高い志をもった頑健な男性が専業主婦に家庭を任せて病院に住み込むしかない働き方が問題だ。そもそも、お国は、医師が余ってくるといっているが、「じゃあ、なぜ女性医師の出産育児が周囲に負担ととらえられるのか、そこまでしっかり踏み込んで分析報道しろよ」と、定見のない身は、自分のことは棚に上げ文句ばかりつけている。

ただ一つ、すっきりとした思いにしてくれたのは朝日新聞のコラム。8月の天声人語「秘密の減点」は近代医学の学校を卒業した最初の女性、エリザベス・ブラックウェルを取り上げたものだ。女性は医師に向かないといわれた時代に、さまざまな差別苦難を乗り越え医師となった彼女が、貧しい地区に女性と子供のための診療所を開いたことを紹介している。

そう、歴史的視点を持たなくては。現実には複雑で、明快な解決法はないが自分たちの立つところが先人のどんな努力により獲得できたものであるかを認識できれば自ずと方向は定まる。

そして、医師免許はライセンスではない、社会に対する責務であると肝に銘じようと自分に言聞かせる。

(理事 長谷川 奈津江)